

昭和の釣りの碩学・松崎明治

不破 茂

松崎明治の生い立ちと業績

一時間、幸せになりたかったら酒を飲みなさい。三日間、幸せになりたかったら結婚しなさい。八日間、幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい。永遠に、幸せになりたかったら釣りを覚えなさい。これは中国の古諺である。このように釣りは古今東西で人類共通の楽しみであり、釣りの随筆や指南書は数知れない。旧知覧町松ヶ浦の出身である松崎明治（まつぎき・めいじ）は日本の釣り文化、特に昭和初期の釣りを語る上で不可欠な人物であるといわれている。彼がどのような評価を受けたかについては、彼に関して書かれたものを以下に列記する。

「これは正真正銘、先生を通り越して“釣り博士”と言われた人物である。」¹⁾

「自身は『釣技百科』の著者になるような、釣りのエンサイクロペディストとなっていったのである。」²⁾

「昭和17年刊行の松崎明治の『釣技百科』はその代表的な出版物で、その後の釣り百科や入門技術書に大きな影響を与えたものである。」³⁾

「昭和14年に日本ではじめての釣り写真集として三省堂より発刊された『写真解説・日本の釣』。博覧強記の釣り研究家でもある松崎明治氏の写真には、戦前の日本の釣り人たちの道具やスタイルが端的に収められている。当時、昭和モダンの筆頭とされた釣り人たちの心・技・体を収めた珠玉の記録である。」⁴⁾

松崎明治は知覧四浦の一つである松ヶ浦の海運商松崎家（やまや）の三代目として、明治31年に生まれた。当時の松崎家は、「西の海が干っても、やまやん世帯は干らぬ」と言われた豪商であり、「松ヶ浦から知覧まで他人の土地を踏むことなく行けた」という大地主でもあった。生家は松ヶ浦の海岸に面しており、自身が著書『釣技百科』にも書いているが、海に潜って魚を突いたり磯から魚釣りをして、少年時代を過ごしたようである。

大正9年旧制川辺中学を卒業後、早稲田大学商学部に入學、大正13年に同大学を卒業して早稲田大学文学部に再入学して昭和2年に哲学科を卒業する。



図1. 松崎明治（兄・松崎明治より）

この時代には早稲田大学に進学したことだけでも大変なことだったと言えるのに、再入学させた松崎家の隆盛は推して知るべしである。

卒業後は当時の東京朝日新聞社（現在の朝日新聞社）へ入社し、文化部で美術を担当した。昭和4年から文化部釣り担当となり、昭和17年に退職するまで続いた。この間に多数の釣りに関する書籍を刊行し、『釣百科』（昭和12年）、『写真解説・日本の釣』（昭和14年）、『釣技百科』（昭和17年）はその代表作である。

松崎明治が新聞記者だった昭和初期は、釣りが非常な人気となっており、各新聞社も釣り欄を充実させていた。殊に、アユ釣りは人気が高く、アユ釣り解禁日の河原では釣り人の肩が触れ合わんばかりの混雑だった。また、タイ釣りやアジ釣りの乗合舟が出現したのもこの頃だった。松崎明治が担当する東京朝日新聞と、佐藤垢石が担当する報知新聞の釣り記事は、釣り人に強く支持された。松崎明治は、釣りに対する姿勢が佐藤垢石と全く異なっていた。佐藤垢石はその名前から明らかなように、鮎釣りを得意とする釣り人から釣り記事を書くようになったもので、釣りの釣果を主体に釣の雰囲気を読み物として読者に提供した。記事はやや誇張的で佐藤垢石

の署名がある。一方、松崎明治は、釣りを漁として捉えていた。釣りは魚を採捕する技術として、釣場や釣果を客観的に記述しており、淡々と釣りに関する情報を記事にした。そのため、彼の名前が記事に出てくることはなかった。

『写真解説・日本の釣』と『釣技百科』

松崎明治の代表的な著作である、『写真解説・日本の釣』と『釣技百科』について、その概要を紹介する。『写真解説・日本の釣』は、戦前の釣り写真集としてまとまった唯一の本であり、昭和の釣りの空気を伝えるものである。その内容は、淡水釣と海水釣に区分され、さらに淡水釣は高層地の釣、山上湖の釣、中流の釣、低地の釣に、海水釣は磯陸釣、沿岸の舟釣、鯛の沖釣、一般沖釣に整理されている。はしがきには、松崎明治の意図するところ、日本の釣りという文化や技術を正確に伝えたいという想いが書かれている。

『写真解説・日本の釣』 はしがき (原文のまま)

“体位向上”と云ふ国民保健上の効果の他に、非常時下の“生産拡充”と云ふ斬新の使命も加はって...常套の“釣遊”は新しい“釣道”の下に再編成しなければならないのではないかと思ふ。釣遊の歡樂を説く著述や釣場の陶醉に贅言を費やした随筆風の出版は既に尠くない。しかし、釣り方と云い、釣場の魅力と云っても自ら現場に行かなければなかなかはっきりした認識が掴めるものではない。

かう云ふ意味で釣を説くには感激に満ちた魅惑的な釣場の景観、全国各地に秘められた珍しい釣技、更に細かくは斬新な釣具或ひは新しい装餌法の末に至る迄これを細かに写真に撮影して、それによって直接眼から新しい釣道の認識を確立することが最も理想的で効果的方法であるやうに思ひ初めたのは既に九年前のことであるが、其の間に前人未到の奥地から波浪高き大洋の釣に至る迄、カメラは常に著者のポケットにあったが、しかし元来写真技術の方は全くの素人で、折角撮影した筈のものでも幾年間は殆んど失敗の連続であったが、数年前からどうやら時々偶然の効果を取める事があるので、飽かず現像して、写ってある種板^{ネガ}だけを大切に保存整理しておいた処、約七千枚の数に達したので、其の中から上述の意義を持つ数百枚を選んで引伸し、精選の上此処に一本に編んで見た。釣界にも未だ嘗つてなされていない試みであるだけに、不備な点も多く、尚ほ又写真技術上からは全く発表する程のものではないであらうが、釣の精神を伝える一つの手段として写真を活用して見た著者の努力だけを認め写真技術上の足らざる點は此処に寛悠して戴きたい。

更に水産立国の立場から沿岸漁業の主要な方法として目下大いに重要視されて来初た我が“釣漁業”上充分役

立つものがあれば著者望外の喜びであり、尚ほ又本書が釣以外にそれぞれ魚類の生息環境の写真記録として魚学研究の上に多少の意義を持ち得れば殊に幸ひである。

生棲環境を異にする数十種の釣技写真を配列する順序には一方ならぬ苦心を要したのであるが、結局魚の生息環境たる「水」の心に従って、“高きより低きに”即ち高層地の釣から川口方面における低地の釣、更に海に入って海岸性一体の磯陸釣から沿岸の舟釣、沖釣と配列して一通りの纏りを付けて見た。写真を見つ簡単な説明と併はせて知らず識らずの中に“釣道”を理解し、“日本の釣”を正しく認識し得れば著者大方の望みは達せられたものである。

昭和十四年初夏

著者識す

本書の内容は、水の流れに従って淡水釣は、高層地の釣に始まり、山上湖の釣、中流の釣、低地の釣と続き、海水釣は、岸から沖合へと磯陸釣、沿岸の舟釣、鯛の沖釣、一般沖釣と並べられている。約7000枚のネガから厳選した166枚の写真は、単に釣場の景観や釣果を見せるものではなく、釣具の構成や装餌法まで細かく示され、いわゆる釣り随筆の風情とは一線を画して、内容も多岐にわたっている。紹介している釣りは、新聞社がある東京が中心であるが、松崎明治自身が日本各地に赴いて、釣りをしながら写真に収めている。それらの釣場は関東以外では、淡水釣では奥入瀬溪流の溪魚、十和田湖の姫鱒、奥木曾の岩魚、九州球磨川の友釣などを、海水釣では、瀬戸内海の鯛釣、土佐の大鯛釣などを紹介している。紹介された釣りの分布を図3に示す。なかでも松崎明治は、故郷鹿児島に対する思いが強かったと推察され、“薩摩のミヅイカ釣”では、“餌木”と“釣上げたアオリイカ”を加えて、他の釣りより多い4枚の写真で詳しく紹介している。また、南九州のメジ釣帆船として枕崎港での漁船や釣具を示している。一方、“少年の釣”のような童心に帰ったような釣りから職漁師の釣りや、登場したばかりのリールやタイ釣餌としてのザリガニまで多彩であ



図2. 薩摩のミヅイカ釣『写真解説・日本の釣』所収



図3.『写真解説・日本の釣り』で紹介した釣り
 淡水釣 ○：高層の釣（溪魚）、△：山上湖の釣（姫鱒其他）
 □：中流の釣（鮎）、▽：低地の釣
 海水釣 ●：磯陸釣、▲：沿岸の舟釣、■：鯛の沖釣、
 ▼：一般沖釣

る。さらに、現在では消滅してしまった釣りも多く紹介されている。“ポカン釣”、“利根の帆掛け釣”“江戸前あおぎすの青鱈脚立釣”、“青鱈の下駄釣”、“南総長者町の投げ釣”、“大東岬の棚釣”がそうである。これらの写真は、当時の釣りの状況をうかがい知ることができる貴重な資料である。松崎明治は、はしがきにも書いているように、彼は釣りに対して深い見識と愛情を持っており、各地で独自に発達した多様な釣りを漁撈手段の一つと捉えて、科学者のように客観的に記録している。

松崎明治の信念の集大成というべきものが、昭和17年刊行の『釣技百科』である。これは、口絵1ページ、序説12ページ、海魚編617ページ、淡水魚編242ページ、釣魚関係文献一覧30ページ、索引43ページにわたる大著である。本書の内容は対象生物の形態的特徴、漁海況、仕掛け、餌、アワセの取り方や釣場ばかりでなく、魚拓、釣り人料理や気象まであらゆるものが、詳細な説明文と具体的な図版で紹介されており、まさしく釣りの百科事典とも言える。この『釣技百科』のはしがきには、戦時下の空気を反映した文面ではあるが、釣りを漁撈手段の一つとして科学者のように捉えていた彼の考えが述べられている。

『釣技百科』はしがき（原文のまま）

大東亜戦争下の今日程あらゆる部門がその最高度の能力を発揮すべく要望されてゐる時代はないであらう。各界の国民亦誰もが各人の関渉を持つ世界で何かの御役に立ち度い念願に燃えてゐる。

釣りの功德と云ふものは決して一律に断じ難い。釣する者の人柄によつても釣相も亦千変万化であるが、これ迄の釣人は多く感情を離れ趣味を超えて釣の技術研究に専念する事を潔しとしない傾があつた。然し世界に誇る水産王国日本の釣技には各地其々釣場或いは漁村に創案され工夫され修練されたものが多く、かうした先人の遺した貴重な釣の技術は或一小地域に秘められ、何時までも広く世に伝はつて重澤を余人及ぼす機会に恵まれず、永久に寒村僻地に埋もれ或いは其極は世の変遷推移と共に衰退の一路を辿る妙技さへ尠くなくない事実を思ひ、著者は安債な批判を止めて、全国各地に起り現在実釣に活用されてゐる全日本の釣技の踏査を思ひ起ち、是を年来の宿題として来た。然るに意図は遅々として進まず益々今後の努力を覚悟してゐるのであるが、決戦下の今日翻つて顧る時、当面の銃後生活で最も重要視されるものの一つは「技術」である。此時に当たつて急遽日本全土に行はれてゐる釣魚技術を可及的広範囲に調査集成することが著者に課せられた現下の使命と信じ、甚だ不完全ながら今日までの調査を蒐め本書の上梓を決意した次第である。

蓋し技術はその用ひ方によつてその齎す処は一様ではない。直接漁獲の方法として活用すれば戦時下の今日極めて重要視されてゐる生鮮食料増産の術となり又魚食国日本民族の南方開発にも何らかの役に立たぬものでもあるまい。更に今日これ国民保健の目的に役立つれば戦時下にふさはしい国民厚生の方法となり、尚ほ又内地、外地を問はず自家食用魚の獲得方法にも資するところが尠くないが、このほか魚の修正研究を中心として或は又大東亜の建設を急務とする海国民の海への認識を深めるよき機縁ともなり、釣の技術的方面は益々その調査研究が必要となるばかりである。

ここに盛るところ、必ずしも「技術」と共に釣の精神的、倫理的、趣味的、情操的な方向の功績を閉却するものではないが、緊急なるものを先にし専ら釣魚に関する技術を主として集成し、説明の簡約を期してできるだけ多くの図版を用ひた。これと共に釣魚に於いて最も重要である観点である魚族其々の習性に就いては紙面の許す限り詳細な記述を試み、学界、水産学、釣界の諸文献など及ぶ限り涉猟し、今日迄の釣魚習性研究の一斑を紹介する事に努め、併せて極端に統一を欠く全国各地の魚名も出来得る限り広く記載し、巻末の索引によつて本書の利用範囲を拡大する事に努めた。

本書の如く其内容に於て広く全国各地の支援によつて

生れた書はその例決して多くないと信ずるが、殊に資料蒐集に当つて特別の援助を賜はつた大阪の吉田、広島藤田、島根の濱田、九州の島田、東北の奥田、朝鮮の梅林、台湾の中尾、北海道の佐藤の諸士はじめ各地の釣友諸彦に対しては其々の項に其の芳名を録し、取材に際して寄せられた絶大の好意に対して感謝の意を表明することにした。尚ほ擱筆に当つてかく面倒な刊行の仕事を快諾援助くださった朝日新聞社出版局の諸氏に謝意をささげるものである。

昭和十七年七月二十日海の記念日

著者識す

ここには日本全国の釣りが詳細に記述されており、それらは松崎自身が釣りをを行うと同時に、朝日新聞の組織で全国から情報を収集したのものである。本書で紹介された釣りの分布を図4に示す。『写真解説・日本の釣』と比べてはるかに広い地域の釣りが取り上げられており、当時植民地であった朝鮮や台湾での釣りもある。

『釣技百科』は後に出版された釣り百科や釣り入門技術書の模範とされているが、それらと大きく異なる点がある。はしがきにも書いているように、松崎明治は対象魚の形態や習性について幅広く文献を調べたうえで、釣の仕掛けや釣り方との整合性を論じている。文献は分野ごとに整理して表1に掲げたが、江戸時代から昭和16年まで474編にも及び、その範囲は魚類学から調理加工まで多岐にわたる。なかでも生物学関係の文献が半分近くを占め、釣り関係の文献より多いことは、松崎明治の考えが如実に反映されたものである。また、釣り関係の文献は江戸時代から昭和10年代までの釣り漁業資料を網羅している。

表3 釣技百科の参考文献

釣り一般	67
淡水魚	30
魚学	62
釣の随筆	31
釣餌	19
釣具	26
一般動物参考書	134
気象・海洋・河川・湖沼	30
暦と潮汐	12
全国釣場資料	31
魚類調理加工法	32

水産資源の持続的利用が漁業の根幹であることは言うまでもないことであり、種類や大きさを選択的に漁獲する一本釣りは、まさしく水産資源の持続的利用技術である。松崎明治は釣りを水圏から生物を採捕する漁撈手段

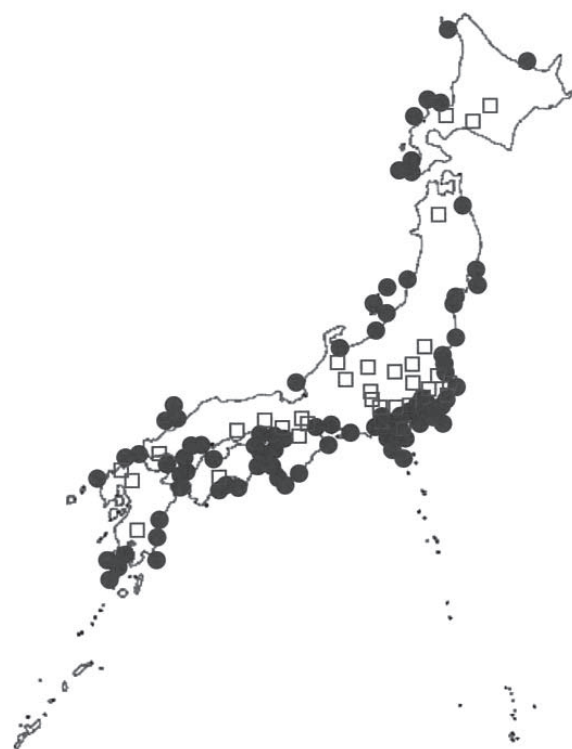


図4. 『釣技百科』で紹介した釣り

- ：淡水釣 台湾台北：アユ友釣、ケンヒー釣、スズキ釣
台湾中部：スッポン釣
朝鮮京城：寒ハス釣、カワメバル釣、
カムルチー釣、フナ釣
- ：海水釣 朝鮮仁川：コチ釣、スズキ釣、ニベ・コイチ釣

の一つとして位置づけて、科学者のような視点で捉えていた。なおかつ、釣りに対して深い見識と愛情を持って各地の多様な釣りを客観的に見ている。彼にとって釣りは研究の対象であり、日本各地の釣りの多様性を記録し続けていた。最後の著作となった『釣技百科』は、日本版釣魚大全とも言うべきものである。松崎明治は夭逝したが、存命であれば釣魚学とも言うべき学問体系を確立しただろう。

松崎明治は全国に赴き自身が釣りをして各地の釣りを紹介しているが、故郷への想いが強かったことが彼の著書から伺える。『写真解説・日本の釣』では薩摩のミヅイカ釣に他の釣りよりもページを使っており、枕崎港の南九州のメジ釣帆船も紹介している。また、『釣技百科』では少年時代を過ごした知覧の釣りが多く登場し、釣り方も詳しく紹介している。それらは、薩南のタバメ（著者注：フエフキダイ）夜釣（知覧町沿岸）、薩南のブダヒ夏釣（知覧町沿岸）、鹿児島県のキダカ（著者注：ウツボ）夜釣、鹿児島県下の水鳥賊磯釣（知覧町松ヶ浦沿岸）、薩摩のミヅイカ曳き、薩摩半島南岸のヤノイオ（著者注：アイゴ）釣、南九州のクレイオ（著者注：メジナ）夏釣（知覧町松ヶ浦）などである。一般に釣りの対象としないイタチウオは、「著者は幼時素潜りでこの魚をや

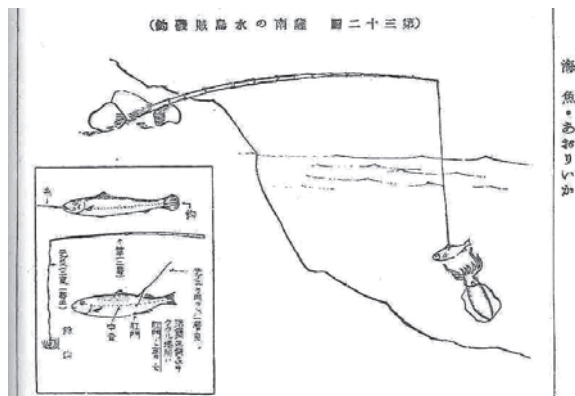


図5. 薩南の水鳥賊磯釣 『釣技百科』所収



図6. 松崎明治の生家

スで突いて楽しんだ経験を持っているが、」と書いている。

帰郷後の松崎明治

昭和17年に朝日新聞社を退職し、家族と共に松ヶ浦に帰郷した。郷里の父親が亡くなり跡を継がねばならなかったことが主たる理由だったと言われているが、戦火が日本本土に及びはじめて、ゆっくりと釣り記事を書いているような風潮でなかったことも、ひとつの理由と考えられる。

松崎明治は、松ヶ浦では地主として農業や塩の専売を行っていた。戦時下ではあったが、松崎家の隆盛は変わらなかったようである。松ヶ浦の港には機帆船が停泊し、そこから伝馬船で下ろされた荷物はずらりと並んだ石蔵まで荷馬車で運ばれていたという。また、松ヶ浦の生家は知覧二つ家の大きな作りで、土間の梁は太くその上には米俵が並んでいたという。この間にも、松崎明治は小舟で釣りや刺し網などを行っていた。東大や九大から研究委託を受けて魚類標本を作成していたようであり、当時のホルマリン標本が納屋に残されていたのを筆者は確認している（平成26年）。しかし、戦後の混乱の中に松崎明治は、昭和25年8月27日松ヶ浦で逝去、享年52歳だった。

代々実家が松崎家の番頭のような仕事をしていたという植村繁美氏は、父から聞いた松崎明治について次のように語った。

「父（植村繁男氏）は、海軍から復員後に松崎家の仕事をしていました。明治さんは、父と同年代であり、人当たりの良い人でしたと聞いています。父は明治さんのお供をして枕崎や坊津あたりまでよく釣りに行ったけど、明治さんが新しく考案した仕掛けで釣ってもなかなか釣れず、明治さんは苦笑していたそうです。明治さんは九大に講義で行っていましたし、魚のホルマリン標本を送っていたそうです。しかし、戦後の松崎家の没落を大変気にしていたそうです。」

松崎明治の死は悲劇的であり、弟の松崎礼一⁵⁾は次の

ように記している。

「鹿児島に帰ってからは、農業をやるかたわら、船を持って漁にも出たし、九州大学あたりの依頼を受けて資料調査に協力するなどして戦争中を過ごしたが、持病の高血圧症が昂じ、そんなことも自由にできなくなり、二十五年八月、兄の大きな重荷になっていた脳性小児麻痺の長男を道連れに服毒自殺を遂げた。享年五十二歳であった。同じ年に愛妻に先立たれたこと、農地改革で父祖伝来の土地を取上げられ、生活の基盤を失ったこと、また、その頃はドッジラインの影響で日本中がひどいデフレで押し潰されそうになっていた時だから、そんな影響もあったのだと思う。」

松崎明治の訃報は、釣り界では大事件だった。松崎明治の死は釣り界にも衝撃を与え、雑誌『水の趣味』は、その死を次のように報じている。

「戦時中帰郷、家業に就かれるかたわら九州大学に席を置き、釣りの研究を続けていられると聞いていたので、いずれまた前書に優る大作を上梓されるであろうと期待していたところ、今度の急変を聞き、しかもそれが家庭的な悩みから自らの手で生を絶たれたことを知って、あまりの驚きに悲しみの言葉もないくらいである。」釣り界は上げてその死を悼み、釣り仲間たちが発起人となって弔慰金を募り、不幸な遺児たちに贈った。松崎明治（まつぎき・めいじ）すぐれた釣りの研究者として、その名は永く語り伝えられるだろう。」¹⁾

松崎文庫

鹿児島大学付属図書館水産学部分館は、昭和の釣り文化を語るうえで不可欠な人材である松崎明治氏の蔵書約300冊、雑誌16タイトルからなる『松崎文庫』を所蔵している。松崎文庫は漁業技術、特に釣り漁業技術の資料として大変貴重なものであり、江戸時代から昭和10年代までの釣り漁業資料を網羅している。この松崎文庫について、鹿児島大学水産学部五周年記念誌⁶⁾には次のように記されている。

「松崎文庫 約二千冊 本県知覧町松ヶ浦の水産特種

研究家松崎明治氏の蔵書全部、並に、標本など、全部の御分譲を受けたものである。

御生前は水産界に於て趣味の蒐集家、研究者として、水産の研究者や関係者のために私財を投じて、種々と御世話くださったのであったが、世の極まりない変転にいや気がさしたのか、秘蔵の図書の整理を学校側に全部おまかせになり、その話が片づいた本年夏、遂に自らの生を絶たれたことは、返す返すも御気の毒に堪えない。

御懇情を感謝すると共に、ご冥福を祈るものである。』

鹿児島大学附属図書館水産学部分館の図書受入原簿によると、2回にわたって約700冊が寄贈されている。昭和24年に松崎明治から、昭和28年に叔父の松崎茂一からであり、後者は松崎明治の三年忌を契機に行われたようだ。鹿児島大学水産学部五周年記念誌⁶⁾の冊数と大きく異なるのは、雑誌の冊数を含めたためと考えられる。

この松崎文庫をめぐるは大学同士の争奪戦があったようだ。¹⁾『釣り好きの森戸辰男元文相が、広島大学の学長時代（著者注：昭和25年～33年）の思い出として次のように語っている。「創設された水産学科（著者注：広島大学水畜産学部水産学科、現：生物資源学部）の図書を集めるのに懸命であった際、当時鹿児島の郷里に隠棲されていた松崎明治君の蔵書をどうしても手に入れたと思った。長く朝日の学芸部に勤務した松崎君は、日本の漁業わけても釣りの研究の権威で、“日本の釣”“釣技百科”などの立派な著書がある。特に豊富な専門的芸術写真を載せた前者は、日本の釣りを描いた最も秀れた書物だと私は高く評価している。この松崎君は同時に、日本の釣り文献のおそらく日本一の蒐集家であった。これに垂涎した私は、朝日にいる同好の木村定君などを介して、どうしても広島大学の手に入れたいと努力した。けれども残念ながら不成功に終わった。この蔵書はどうかや九州大学へ落ちていたと聞いている。」この松崎蔵書は、現在鹿児島大学水産学部に松崎文庫として架蔵されていると言われるが、ともかく大学どうしで争奪戦を演じるほど高度なコレクションだったことは確かなようだ。』



図7. 「松崎文庫展」
(鹿児島大学附属図書館水産学部分館H26.7.14～18)

それではなぜ松崎蔵書が鹿児島大学水産学部にあるのだろうか、それを解く手がかりが『薩摩烏賊餌木考』⁷⁾にある。鹿児島県内各地の諸氏への謝辞の中に“知覧町松崎明治”の名前があり、参考文献12編のうち4編が松崎明治の著作である。また、岡田喜一（明治35年生）は松崎明治（明治31年生）と同世代であり、科学者としての姿勢が共通している。さらに、岡田喜一とは烏賊餌木を通じて親密度を深めたことだろう。鹿児島大学水産学部の前身である戦後発足したばかりの鹿児島水産専門学校（昭和21年～昭和24年）も広島大学と同様に、施設の充実が急務だったといえる。鹿児島水産専門学校の校長として函館水産専門学校教授から赴任した山本清内（昭和24年～31年；水産学部長）も森戸辰男と同様の想いだったと考えられる。岡田喜一は東京での藻類研究に区切りをつけて山形県の山村に隠棲していたが、山本清内の招きによって鹿児島水産専門学校へ赴任してきた。施設の充実を目指していた校長の山本清内が、岡田喜一と松崎明治のつながりを知って松崎明治に働きかけて、松崎蔵書の寄贈に至ったものと推察される。

本稿を執筆する機会をいただきました南九州市教育委員会坂元恒太氏並びに、松崎明治に関してご教示いただきました中村伝美・皓子御夫妻、植村繁美氏に感謝いたします。

参考文献

- 1) 金森直治：新聞記者 松崎明治—哲学科出身の釣り博士、「列伝日本の釣り師」所収、119-124、岳洋社、東京、1980。
- 2) 加藤須賀雄：釣りと漁<佐藤垢石と松崎明治>、「かげろう釣り あとさき」所収、38-44、釣り人社、東京、2001。
- 3) 丸山信：変わりだね釣り師、松崎明治・荒畑寒村、釣魚文学散歩、「魚の日本史」所収、新人物往来社、東京、1987。
- 4) 斎藤海仁：松崎明治、Fishing Café、35、23-26、株式会社シマノ、堺、2010。
- 5) 松崎礼一：兄・松崎明治、解題「日本の釣集成」所収、アテネ書房、東京、1975。
- 6) 山本清内（編）：五周年記念誌、鹿児島水産専門学校、設備の充実、108-110、測上印刷、鹿児島、1951。
- 7) 岡田喜一：「薩摩烏賊餌木考」、自序、内田老鶴圃新社、東京、1978。

※松崎明治と松崎文庫については、『Fishing Café』49（平成26年12月10日発行）41-42頁に「昭和の`釣り文化遺産、松崎文庫」として掲載されています。

（ふわ しげる：鹿児島大学水産学部教授）